

# ムービー・エッセイ

これだけは見逃せない邦画・洋画セレクション

## 東京物語



一俊 辺 洵

尾道に住んでいる平山周吉（笠智衆）とその妻とみ（東山智恵子）の老夫婦は、元気な内にと東京に住む子供達を訪ねる。しかし、町医者をしている長男幸一（山村聡）と美容院経営の長女シゲ（杉村春子）は、着いた当初はともかくも、そのうち、煩わしくなつて、二人を親孝行のふりをし、熱海の若者向けの安宿に追いやる。夜通し続くマージャンや流行歌の鳴りやまぬ喧騒の中で、場違いな二人は、眠れない夜を

部の所を訪ねる事にする。「とうとう宿無しになつてしまつた」と自嘲的に笑う周吉。とみは、その夜、昌二の遺影が掲げられた紀子の小さな部屋に温かく迎えらる。肩を優しくほぐしてくれた上に、思いもかけない昌二のフトンに寝かせてくれた紀子に、とみは、感涙にくれ、戦死した息子を忘れて再婚するように勧めたのだ。そして明るく日、東京駅に見送りに来た子供達に「みんな忙しいの

にほんまにお世話になつて。でも、もう皆にも会えなし、これでもしもの事があつてもわざわざ来て貰わなくてもええけん。」と言う、とみの言葉を残して、二人は尾道への帰途につくが、その車中でとみは具合が悪くなる。一時、持ち直したかに見えたが、突然容体が急変する。脳溢血である。母危篤の知らせに、子供達は何を考え、どう行動したのか？そして紀子は？ここから物語はいよいよ佳境に入つていく。

派手な演出も主題歌もなく、どの家庭でも起こりうる日常を白黒の映像で淡々と描いている様に見えるが、目指すところは深淵である。核心に迫る手法は、考古学者の遺物を掘り出すときの刷毛の使い方にどこことなく似ていて、知らない人には、じれつたい程に、丁寧で退屈す

らあるが、知っている人はわくわくして退屈どころか興奮の連続である。この様に、この作品は見る人によって評価が大きく分かれる。ただ、一度味をしめると、年をとることですら楽しみになってくる。何故なら、人生経験が深まるに連れて、それまで見過ごしていた、何でもなかったはずのセリフや場面が、味わい深い名セリフや名場面となつて次から次へと蘇ってくるからだ。また、作品の評価に自分の成長を重ねる楽しみもあり、鏡にも似て、何度見ても飽きることがない。それにしても、笠智衆、扮する周吉が「気のきかん奴でしたが、こんなことなら生きていううちに」と優しくしておけば良かったですよ…ひとりになりますと急に日が長くなりますわい…」と淡々と語るシーン。とても演技とも思えない名演には無常という深淵に迫る小津監督の気迫を見る思いがする。また、最愛の者を失った喪失感を共有する周吉と紀子を最後の舞台に残して二人にクライマックスとも言わなければならない見事さには脱帽するしかない。

1953年制作の日本映画、監督小津安二郎映画の集大成とも言える作品。テーマの普遍性と心理描写の完成度の高さから国際的にも極めて高い評価を得ている。ちなみに生涯独身を貫いた小津監督は撮影時51才、72才の老人を演じた笠智衆は当時48才というから、これもまた、驚かされる。

過ぎます。そこだけ灯りの消えた部屋の前に律儀に揃えられたスリッパ。翌朝、旅館を抜け出し、浴衣姿のまま熱海の堤防に腰掛け寡黙に静かな海を眺める二人。予定を早めて帰ってきた二人にシゲは不機嫌を露わにする。居づらくなつた二人は、シゲの家を出ることにする。とみは東京に着いた当初、親身に尽くしてくれた戦死した次男昌二の未亡人紀子（原節子）のアパートへ、周吉は東京に住んでいる尾道の古い友人服

には、じれつたい程に、丁寧で退屈す